

第3部 奥山千鶴子さん

この国は、子どもを育てるのに、いつから冷たくなったのだろうか？ 子どもと家庭を応援する仕組みは、やっぱり必要だと思う！

「家庭教育を代替するような社会システムは不要である」というような大きな声。
きっと介護保険制度創設期にも、「親の介護を代替するような社会システムは不要である」といわれたのでしょね。

■ はじめての子育て

私には能力がなかった ^ ^ ;

- ・ 1985年 雇用機会均等法施行の前年に就職
- ・ 1995年 育休中に 阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件
- ・ 1997年 退職 地域デビュー
 - * 孤立、とまどい、てさぐり
 - * 生活が180度変化
 - * 経験不足
 - * 地元の情報が入手しにくい
 - * 専業主婦はお気楽？と思いきや!?



■ 子育てしていて わかったこと

- ・ 仕事の能力は子育てには無力 生活感がないわたしたち
- ・ 子どもに関わらずに親になるわたしたち
- ・ 地域、世間様と縁遠いわたしたち
- ・ 子どもが生まれた途端、母親役割は自他共に厳しく迫り来る
- ・ 生活情報は昔も今も口コミ
- ・ 父親より母親の負担感、不安感は大い
- ・ 母親なんだからやって当たり前、誰もが通った道 ほんと？

→ 先駆的な自治体の取組みで目が覚めた

「武蔵野市立 0123 吉祥寺」 児童館でも保育所でも幼稚園でもない親と子のつどいの場！
行政がつくった！ 専業主婦のわたしたちも 「助けて！不安！って言うていいんだ」

○ 子育て家庭のよりどころ 地域子育て支援拠点、子育てひろば

「子どもを産み育てることが、もはや当たり前ではない」ということから目をそらしてはいけないと思っている。ひとりでも生活に困らない社会であり、仲間がいれば家族は必要ないという人もいる。

そんな中でも、あえて子どもを産み育てる社会的意義をどうしたら発信できるのか？それは、身近に子どもがいることであり、子どもがいる生活の意義が見いだせること、それを認めて応援できる社会であることのような気がする。それを発信できるのは、間違いなく子ども自身だったり、子育て中の親たちであり、そこに関わる大人たちである。

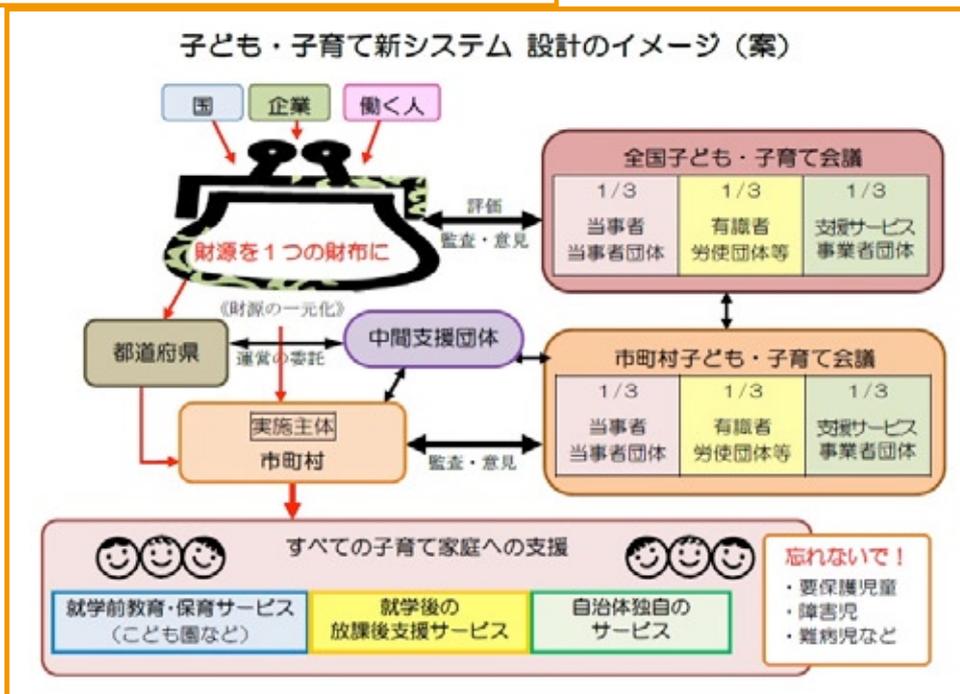
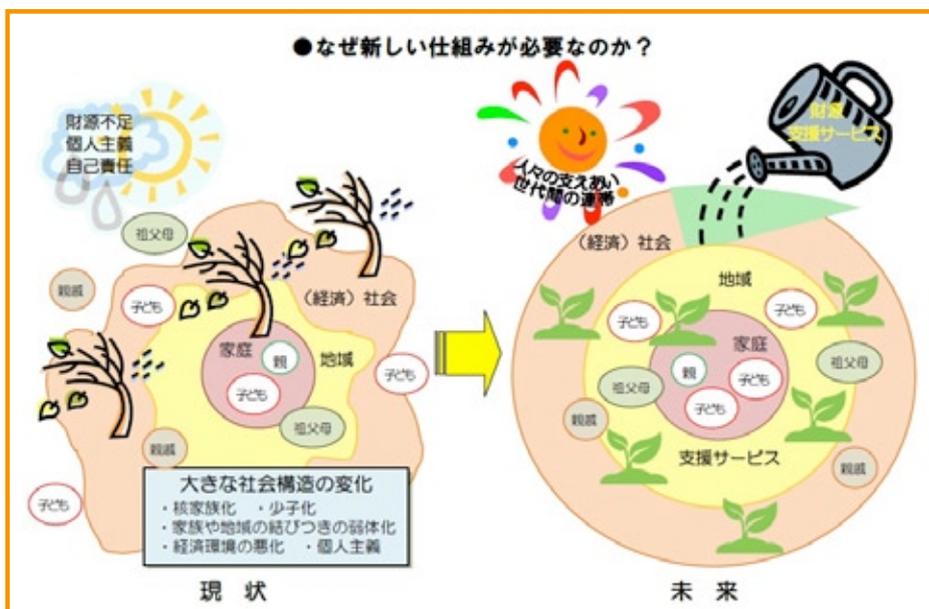
初めての子育て、子どもが小さく外に出ることもままならない、夫も早く帰ってこない、そんな中で孤立しがちな母親にとって、同じ境遇の親同士で集える場というのはたいへん貴重な場となる。子育てひろばで過ごすことで少し安心感や余裕が生まれれば、親たちは子どもがいる生活を肯定的にとらえ、場合によっては次に子育てひろばに来る新しい親子の支援まで買って出ることがある。多くのこのような場面を通じて、私は弱者と言われる人たちにも潜在的に力がある。それを発揮してもらうためには、親が受容され誰からも責められない安心できる環境が必要だと実感した。子育てひろばは、まさに親たちのそのような潜在的な力を自ら自然に見出せる場所だと思っている。けっして教え指導する場所ではなく、親子に安心を与える場所なのだ。

子どもは、家族という小さな社会に生み出されるが、親を支えるためのサポートが必要である。それは、安心できる場、信頼できる場があって初めて支援として機能するのではないか。人は人の中で育つ。親自身もまったく同じであると考え。しかし残念ながら、ほっておいてもそのような場ができる時代でなく、子育て支援が必要な所以だと思っている。



につぼん子育て応援団の提案

- 1 主体は子ども。「すべての子どもの発達を切れ目なく支える」視点を明確にする
- 2 国と地方それぞれに「子ども・子育て会議」を設置する
- 3 国と地方が役割分担し、責任をもってサービスの質と量を確保する
- 4 基礎自治体と現場の支援者を支える中間支援の充実、人材育成を強化する
- 5 現物給付、特に個人給付以外の取組への財源を確保する
- 6 困難な状況にある子どもたちへの支援を合わせて充実する
- 7 社会全体で必要な負担を分かち合う



(特定非営利活動法人びーのびーの & NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 & につぼん子育て応援団 奥山千鶴子)